

黒猫的、短編集〈純愛編〉

身ヲ灼ク愛ニ成レ

うつり猫

『**聖**なる夜に二人』

……2P

『**雪**融け上司と』

……28P

『**S**ILVER×HAPPINESS』

……60P

あとがき……は最後に(=^・・^=)

はじめに――

この物語は**フィクション**です。
人物・団体・名称は全て架空であり、
実在のものとは関係ありません。

寝る前や、お仕事に取り掛かる前、
悲しい時や、不安な時、ご褒美に。

スキマに読んで頭を切り替える。

そういう作品集だと思って
お読みいただければ幸いです。

『聖なる夜に二人』

貴方は愛しい人と一緒に愛し合った日は覚えていますか？

初めて恋して、初めてデートをして、初めての告白……

一緒に食事をしたり、旅行に行ってみたり、そして肌と肌を重ねてみたり。それら一つひとつが忘れられない経験となつて、今の関係を作ってくれている。

「——牧人（まきと）！ 今夜の商談なんだが、用意はできてるか？」

「用意……はい、先輩が言つてた通りに用意してきましたけど」

季節は冬、外の人たちはクリスマスだと聖夜だと沸き立っている中、俺はシワ一つないスーツを着こなし、急遽決まつた大事な商談への準備を進めていた。

「……はあ」

「ん？ やけに消極的なため息だな、どうした」

「どうしたこうしたもないですよ、今夜遅くなるって伝えた時の妻の声で気分

が下がってまして……」

『——そ、そうなの？　そっか、うん……大事なお話だもんね、うん、いいの、それよりもね……えっと……うんっ、取引先に失礼のないようにね！』

休憩中にその旨を妻に連絡したとき、その声はわかりやすいほどに寂しげで、ものすごく申し訳ない気持ちにさらなる重しをひっかけられたようにずーんと重くなっていた。

「まあ、気を落とすな……急遽決まった商談には取引先も不服らしいからな。辛いのはお前だけじゃない。私だってそうだぞ？　せっかくここ一年ほど予約が難しいレストランのディナーをようやく掴み取れたのに、こんな仕打ちはあんまりだと思わないか？　大体こちらの不手際でもないのにへこへここと頭下げて二つ返事で了承するとは上の奴らも……」

「やめましょう!?　これ以上はますますやるせなくなってきましたよ……」

「そうだな」

言葉を口にすればするほど声のトーンが落ちていく先輩を見ているだけで背筋が凍りそうになる。先輩も良い人なのだが不機嫌な時の雰囲気と表情が普段と極端に化けるのでひやひやしてしまう。

「やれやれ、とんだメリークリスマスとやらだ……よし、打ち合わせするぞ」
「はいっ」

◆ 1 ◆

「はい、それらにつきましては弊社に常設してありますこちらの設備を使用して他社との差を低コストかつ高品質で埋め進めることが可能かと……」

午後8時半、取引先にて商談の時間、この時間は思ったより堅苦しいものではなく、お互いに「こんな日に大変ですね」と軽い愚痴をこぼしつつの商談となる。

「……なるほど、確かにこのプランですと、良い具合にコストを抑えつつも量が可能。ではこちらのプラン、来年初月に導入できるようにこちらでも進めますね。しかし……この資料は彼が作成を？」

先輩から手渡された資料をまじまじと見つっ感心した様子で聞いてくる。

「はい。前回では不明瞭な点が多いと感じましたので、極力わかりやすく、確認漏れや疑問が生まれないようにと」

まさか先方に褒められるとは思っておらず、少し巻きで説明する。

「彼の作る書類は見やすく、今回この席にも同席させていただきました。もし不明瞭な点がございましたら迅速に対応しご回答させていただきます」

先輩が堂々と述べると先方の人たちは感服のあまり後退の姿勢を見せる。交渉事において、その押し引きを一瞬で感じ取れる直感、先輩の凄いところだ。

こうして無事取引を終えた俺たちはゆっくりと帰路へ着くことに。

「先輩、駅は反対側ですけど」

「ああいや、彼がここまで車を回してくれるとメッセージを送ってくれたんだ。だから近場のカフェで珈琲でも買って待っていいよと思っただけ」

「そういうことなら、ここで解散ですね」

「うむ。また来年——となることを願おうか。奥さんにプレゼントでも買っておくんだぞ？」

わかっています、そう先輩に返して俺は駅の改札をくぐる。

電車の中、通知のバイブレーションに気づいた俺はスマホを取り出して通知の主をメッセージを開いて確認する。

『おしごと、終わった？』

妻、恵（めぐみ）からのメッセージ。単調でありきたりな確認のメッセージに見えるが、どこもない寂しさを感じる。

『終わったよ。これから帰るね』

『ほんと？　じゃあケーキ仕上げて待ってるね』

『ケーキ？　大変じゃないのかい？』

『ううん、平気。自信はちよつとだけだけど、牧君に食べてもらいたくて』

『……ありがとう。急いで帰るね』

心の内側からぶあつと花が咲いたように気分が高揚する。クリスマスのプレゼントも実は既に用意してあるのだ。これを渡したときの妻の顔がどのように変化するか心の底から楽しみだ。



「——牧君、お帰りなさい♡」

「ただいま。メリークリスマス、恵」

「あ！ それは先に私が言う言葉だった！」

玄関でいつもとはちよつと違った会話を繰り広げていく。そんな会話を暫く楽しんで後、俺は恵に手を引かれてリビングへ案内される。

「……っ！ これ、恵が準備したのか」

目の前のテーブルに並んでいるのはローストビーフに、彩鮮やかなサラダ。程よい焼き目のバケツトや滑らかそうなマッシュポテト、そしてチョコペンで器用に『めりーくりすます♡』とプレートに描かれた見事なホールのクリスマスケーキ。それだけじゃない、部屋中に飾られたクリスマス仕様の装飾やツリー、これらは会社に行く前はなかったはず。そうなる……

「全部ってわけじゃないの……でも、ローストビーフはセールで安くなつてたから。でもマッシュポテトやケーキは手作りよ」

これら全てを用意したとなると恵は本当にすごい。普段も季節感を大事にしてる彼女は、先々月末のハロウィンでも手の込んだ装飾を施してくれたものだ。

「すごいな……素直な言葉しか出てこないよ」

「よかった♪ 最初はお風呂がいいかも、その方がゆつくりできると思うわ」

「じゃあ、そうさせてもらうよ」

「うん、じゃあお背中流させて。あ……我慢はして？」

我慢、それが何を指すかはなんとなくわかる、というか男の本能で悟る。

「善処してみる……」

「うん、よろしい♪」

お風呂シーンか、それも語りたいところだけど撮れ高はそんなになかった。理由は勿論、俺がちゃんと目の前のご馳走を我慢したからだ。

「——ご飯、どうかな？」

「美味しいよ」

「……ならよかった」

理性を保ちつつなんとかお風呂も入り、日付が変わる前に手早くご飯を食べていると恵がぷうと頬膨らませている。

「えっと、もう少し味わって食べたほうが良いのかな？」

「……う！」

気に障ってしまったのか、今度はわかりやすいほど大きく頬を膨らませる。いたい何が正解なのだと表に出さないよう悩んでいると、恵が少し不満そうに口

を開く。

「お仕事で遅くなってしまったのはわかります……どうにかしてなんて無理は言えません。でも、寂しかったんです」

恵のフォークを持つ手にきゅつと力が入る。

「寂しくて、寂しくて、寂しくて……牧君も同じ気持ちなのかなって。もしお風呂場でえっちなことでもしたら、牧君も一緒になってシてくれるのかなって」
「……」

どうやら恵が不満そうにしていたのは、俺が手を出そうとしてこなかったことらしい。確かに俺は体を洗ってもらうときにあんなことやこんなこと、愛撫のよくな直接的なものではなかったにしろ、ボディタッチなどが妙に扇情的だったのは覚えている。

「お風呂に入った時間、十時ごろでした……ご飯も今食べて、もう十一時半。これじゃあどんどん減ってしまいます」

「減る？」

「減っていつてるんです……」

何が減っているのかは俺には皆目見当がつかない。もしかして恵の機嫌か？

それともクリスマスという特別な時間だろうか？

「……私より、牧人君のほうが詳しいはずです。そういうの」

「詳しいって……俺にはさっぱりだよ」

「……の時間です」

本当にわからないんですかと聞いてきた恵に俺は困った表情を見せていると、恵もしびれを切らしたのかとある言葉を口に出す。

「せ、性の六時間です」

「……え？」

「性の！ 六時間っ！」

聞き間違いではない。はつきりとした言葉だ。

「そ、それは……えっと性の六時間？」

「性の六時間」

「あの六時間？」

「あの六時間です。十二月の二十四日午後九時から翌二十五日の午前二時まで、男女がその……せ、せ……愛し合う人たちが多い日です」

妻なりの説明を終えた途端に紅く色づいていた恵の顔はボンっという効果音が

似合いそうなほどの湯気を頭から吹き出し顔を俯かせる。

「今は十一時過ぎ、もうすぐで日付を跨いでしまします。そ、そうになると、あと三時間しかないんです……お片付けもしないといけないから、全部終わると一時間もないかもしれないのに……」

ん？ 恵の言葉にちよつとした疑問のかけらが引つかかる。どうしてそこまで性の六時間にこだわっているのか、妻にとってそれほどまでに大きな問題なのか――些細でスルーしがちな疑問だがまるで小骨のように思考に引つかかる。

「恵、どうしてその……性の六時間？ にこだわっているんだ？」

「えっ？ そ、それは……みんなそういうことをしてるってことは、性欲とかすごいことになるのかなって。私はね、よくわからなかったけど」

「……？」

妻の理由に思わずわかりやすいぐらいに首をかしげる。

「え？ だ、だってそういう周期とか、環境とかそういう理由でお盛んになったりするんじゃないの？」

純粹な瞳だ。俺も詳しいことや真偽のほどもわからないがおそらくは眉唾もの噂だろう。

「んーと、それで、性欲がすごいことになったとしても別にどうってことは」

「あ、赤ちゃん、できやすいかなって……」

「おお。今ぐさってきた。」

恵のまっすぐで純真な思惑は思った以上にクリティカルヒットする。

「……そ、そうか。確かに？ 性欲が増せば、その……回数というか濃度というか、うん……当たりやすくは、なる……のか？」

なんだか頭が混乱してきた。まあ満月や新月といった夜に気が高ぶるといふことはあるらしいから、きつとそういったものの類なんだろう。

「ああ、そうだ——せっかくのクリスマスだから、これをプレゼントしようと思っただ、はい」

俺はこれ以上よくわからないスパイラルに巻き込まれてしまう前に、鮮やかな赤色の包装紙と煌びやかなリボンで装飾された長方形で小さめのプレゼントを妻に渡す。

「クリスマスプレゼント……っ！ こ、これっ、開けてもいい!?」

「うん。タイミングを見失うところだったよ」

「あう……ご、ごめんなさい」

「ううん、気にせず開けていいよ」

そう促すと恵は包装紙を傷つけないように慎重に開けていく。

「あ、これ……」

包装紙を外して、出てきた箱のフタを開ける。そこに入っていたのはシンプルながらもダイヤモンドが施されたネックレスだった。

「これって、私の欲しがってたネックレスだよね……？」

「うん」

「高かったよね？ 私も流石に値段は覚えてるよ？」

「でも欲しがってただろ？ この日の為に頑張って貯めたんだ」

手痛い出費だとは思っている。でも恵がショーケースの中にあつたこのネックレスを食い入るように見ていたのを覚えていた俺は、店員さんに頼み込んで取りおいてもらっていたのだ。店員さんも「奇跡ですよ。普段ならすぐに売れてしまうのですが……奥さんを思う気持ちがこのネックレスを守ったのでしょうか」と少し不思議そうな顔をしていたのを覚えている。

「えっと、その……じゃ、じゃあ、明日これ着けてデートしに行きたいっ」

本当は今すぐにでも着けてほしいと思っていたが、わくわくドキドキしている

妻の姿にそうは言えず、楽しみだなあと笑う。

「……その、それでね？　本当は欲しいものがあつて……なんて言ったら、牧君怒る？」

「欲しいモノ？」

となると俺のリサーチ不足だったのか。いや、でも直近の恵みからはそう言つた話が出ていない。

「う、うん……これ言つと、すごい欲張りな女だつて思われそうで……」

「思わないよ、絶対。すごい高いモノならちよつと待つてほしいけど、恵の期待には応えたいから」

俺がそう言つと恵は「あうう」ともじもじと身体をくねらせながら顔を赤らめて、綺麗にたたまれた包装紙の上に置いたリボンを手に、こちらへ近づいてくる。

「じつとして」

お互いの息が交じり合う距離まで近づかれ、首にきつくならないようにリボンを巻かれる。

「……………っ」

「……」

首に丁寧な蝶結びされたリボンに手を触れつつ、状況を整理しようとする。

「えっと……欲しいモノっていうのは、俺？」

こくんと恥ずかしそうに頷く恵。

「牧君がね、欲しかった。最近ご無沙汰だし、私も段々寂しくなってきた……でも牧君がお仕事忙しそうで、今日までは我慢してみようかなって……っ！」

それでそれだと言いたいことを自分なりに伝えてくる妻の言葉を遮ることはせずに、しっかりと受け止めていく。

「だからっ、今日は、牧君が欲しい。ダメ？」

全てを言い終えた後、その興奮からなる少し荒れた息遣いに、潤んだ瞳、そんな状態の彼女のお願いなど――

「――あっ」

俺は妻との距離を詰めて、勢いのままに両手で抱きしめる。抱きしめるしかないじゃないか。

「……これって、おっけーってことでいいの、かな？」

「うん。ごめんな、忙しくてもちゃんと触れ合うべきだった。こんなに寂しい思いをしていたんだって、今気づいた」

「ううん、私も牧君の奥さんだから。もう少し我慢しないといけないの」

「……」

不器用で平和な意地の無言の鏝迫り合いが始まりかける。

「……えっと、じゃあプレゼントは俺で？」

「あつ！　そ、そう！　牧君で！」

「すぐに？」

「……うん、すぐに」

恵はそう頷いて、俺の手をとって寝室へと案内する。寝室に入ってまず驚いたのは、ほんの少しだけクリスマス仕様になっていたことだ。

棚に飾ってあるミニチュアのクリスマスツリー、赤色でクリスマスの装飾がされたアロマキャンドルと改めて妻のこだわりを驚いてしまう。

「……」

部屋の真ん中、お互いが直立の状態で見つめ合う。心音が大きく跳ね上がり、妻に聞こえてしまっているかもしれない。アロマキャンドルの柔らかい残り香に妻の纏う柑橘系の匂いが鼻孔をくすぐり、本能がこれから情事が始まるぞと、警笛を鳴らしてくれている。

「リボン取るね」

妻が俺の首に巻かれたリボンに手をかけて、するりと解いていく。リボンがぱさりと床に落ちた時、妻の顔はすぐ近くにあった。

「んっ………♡」

唇に柔らかく湿り気のある感触、雰囲気飲み込まれつつあった俺はそれが妻からのキスだと認識するのに数秒遅れた。

「ちゅっ、ちゅる………んっ、はぁ………」

貪るように、強欲なキスをしているつもりなのだろう。妻のディープキスは子犬のじゃれつきのように拙く、それでいて無邪気で夢中で実直なキス。

「牧君、もつと、んっ………もつと、するっ♡」

今まで我慢してきた分が恵の背中を押しているようで、彼女の食い気味に続くキスに思わず後ろへ下がりがりそうになる。

「んっ、ろお………ぷはっ、逃げないで。ここも、すごい張ってますよ………」

甘い吐息と唾液が脳内を巡る。高まる体温に不規則な心音、こっちも我慢していた分、体は正直に反応している。

「恵が可愛いから、かな？」

「可愛いだけでは足りませんよ……?」

「じゃあなんて言ってほしい?」

「言葉じゃ伝わらないことを、私に」

そういつて恵はベッドを示す。俺たちはゆっくりとベッドに倒れこみ、再びお互いを見つめる。

「あ、性の六時間といえは……じつは蕎麦の六時間っていうのもあるんだよ?」

「蕎麦の? それは今と関係が?」

「思い出しただけです。それでは、お願いしてもいいですか……?」

ちよつとした小休憩を終え、俺は恵の胸に触れる。

柔らかくて、生半可な力では押し返されそうな程の弾力にじんわりと伝わる温もり、これが妻の——恵の胸。お風呂場で背中に当たっていたはずなのに、こうして伝わる掌の感触に再度興奮が沸き立つ。

「……っ」

「なに? どうしたの? 私の胸、ヘンかな?」

「いや、こんなに柔らかかったのかなって……」

不思議そう表情で聞いてくる恵に対してごまかし交じりの笑みを向ける。

「ンっ、んうっ……」

ただ触れているだけでは恵も面白くはないだろう。俺が彼女の乳房に指を沈めると、じれったいような吐息を漏らし始める。

「はあっ、んんっ……うあん。服がしわになるから、生でお願いっ……」

「わかった、じっとしててくれ」

衣服を脱がし、下着もずらしていく。そして露わとなった肌色の乳房は微かに汗ばんでおり、甘酸っぱく熟した果実のような香りを放出している。汗の湿り気により恵の肌は掌にしつとりと吸い付き、ごく僅かな息遣いですら感じる。

「牧くっん……ふう、んうっ♡ ああっ！」

胸の愛撫を続ければ続けるほどに恵の嬌声に艶が生まれていく、彼女の余裕が徐々に削られていく様に更なる欲情を抱いた俺が次に目を付けたのは双丘の頂き、鮮やかな桜色をした淫尖だ。

「ン——」

「ひうううっ!? ま、まきくんっ！」

尖りを包み込むヌメリ気に見開く恵。

「やっ、ま、待ってえ……っ、ンんっ！」

甘い風味、わずかな塩気が脳内をピリつかせる。こりこりとした感触が舌に転がる度により零れる乳房が口周りを擦ってくる。

「だめっ、私そこっ——よわいつ、のにつ！ はあ、はあっ！」
弾んだ声に乗る色気は彼女にも小さな波が来ているという証拠だ。だとしたら、もう一押し……胸の愛撫だけじゃない、決定打になりえる部分を。

「——っあ！」

胸の下。違う、もっと下腹部へ、下腹部のさらに下。

片方の乳房に触れていた手を離し、薄布を超えた先の淫裂へと滑り込ませる。

「んんっ、くうっ！ した、ソコまでっ……!?」

胸の愛撫、はたまた既に濡れていたのかぬちゆりと滴っている恵の秘裂の奥へと指を侵入させる。

「やっ、あっ——ふあああッ！」

入口辺りの膣壁を掻いた瞬間、恵は大きく体を仰け反らせ絶頂する。膣内は侵入された指をきゆうと締め付け、俺の顔は乳房で軽く圧迫される。

「ああっ、はあ、はあっ……はふっ、んう……ン……ああ」

上下の愛撫による絶頂を迎えた恵の体から強張りは徐々になくなっていき、糸

の切れた人形のようにくたりとベッドへ倒れこむ。

「恵、大丈夫か？」

当の本人が何を言っているのか、俺は恵の腰に手を添えて声をかける。

「はあ、ん……ん、だいじょう、ぶ……ちよっと久しぶりで……ごめんね、一人だけイってごめんさい……」

「恵は気持ちよかったんだろ？ いいさ、それで」

「だめなのっ！ それじゃダメっ、牧君もよくなってくれないと……イヤ」

そう恵はゆっくりと俺の張りつめた股間へと手を伸ばし、下着ごとおろされる。すでに興奮状態のペニスを目の当たりにした恵は陶醉するような笑みを浮かべる。

「もうこんなにも、大きくして……やっぱり焦れたかったですよね」

もう少しだけ我慢してくださいねと恵は亀頭の先にキスをした後、俺をゆっくりと押し倒して、上に跨る。

「もう大丈夫なのか？」

「大丈夫、まだまだいけるから」

にこりと微笑む恵の表情は少し強がっているようにも見える。だけどそれを言及したところで、彼女の機嫌が悪くなるだけだ。

俺はだったら任せるよと恵の瞳を見て頷く。

「あなたは、動かなくて、いいから……私につ、任せてえっ!」
「んおっ!」

勢いのままに恵は俺のペニスを自身の膣内へと滑り込ませる。躊躇なく一番奥へと飲み込まれたペニスに膣肉がうにうねと絡みつく。

「くう、ンっ……! まだ、まだ出てないですか?」

「なんとか、ね」

挿入だけで射精してしまつては男の名折れ——といつてもこういったことはおろか処理ですら久々なので一瞬だけ限界のところまで波が来ていたことは内緒だ。

「じゃあいきますね。我慢して、我慢して、限界まで……♡」
跨った状態で恵は円状にゆっくりとグラインドし始める。

「こうやって、こうっ……ぐり、ぐりっ……ンっ」

亀頭はこりつとした部分に押し付けられ、竿は膣壁に舐め回されて咀嚼されるように膣内で踊る。ゆっくりとたまに激しく、そして飽きが来ないように上下の蠕動も織り交ぜてくる。

「これ、すごいなっ……いったいどこで?」

「フフフッ♪ 内緒です。気持ち良いなら、うん、良かったです」
それにしても恵の腰遣いはぎこちなくも妖艶で、彼女なりの努力が快感となつて体に伝わってくる。

「——っ、ふう♡ 牧君、ちゅう……」

体を倒し、覆いかぶさるようにキス。最初とは違い舌で閉じられている唇をこじ開けられ、彼女の舌をつたい唾液が口内に流れ込む。

「んろっ、ほお……ろおっ、あむ。んん♡」

「めぐ、み……もう少し、舌出して」

「はい……ああ、んちゅう、ちゆるるう……くあっ、あう」

口内に侵入してきた恵の舌を唾液ごと吸いながら彼女の唇も食みつつ、俺は彼女の腰に手を当てる。

「んっ、だめ……牧君は動かないで、私が、今夜は私がするんだから……」

「でも我慢ならないよ、このままじゃ生殺しな気分だ」

確かに彼女の腰遣いは気持ちいいが、まだ導火線に火をつける最中のようなじれったい快感。こっちの息子は爆発したいというのに、勢いが足りない状況なのだ。

「むっ、んん……動きたい、の？」

「一緒がいいな」

「……じゃあ約束して。イクときも、一緒がイイ」

ちよつと不満そうな表情を浮かべるも、こっちの要望を前面に否定する気はないようだ。俺は「わかった」と約束を誓う代わりのキスをする。

「いくよ、恵」

「うん——うあっ！」

恵の蠕動に合わせてこちらも腰を軽く突き上げる。上手くかみ合うだけで亀頭が奥の入り口にしっかりと当たり、今まで以上の快感が下半身から駆け上がっていく。

「ま、まきく——これっ、このっ！ こっんって、コンコンってきて！ やあ、あつ、気持ち、ふあっ！」

彼女も同じように感じているようで、予想以上の快感に戸惑いながらも腰を動かし続ける。

「すごい、牧くんっこれ！ んひゅっ、ンンっ、あんっ！」

締まった膣内が竿を全体を擦り上げ、ばちっ痺れるような射精感が膨れ上がった

ていく。ベッドのきしむ音の感覚が狭くなればなるほど上がっていくボルテージに俺も限界を迎えようとしていた。

「めぐ、みっ！ 俺、そろそろっ……やばいつ」

「うんっ、わ、私も……これ、きてるからっ！ 大丈夫っ、一緒に、一緒にイッて——私っ、イクっ！」

絶頂の刹那、俺のペニスは膨張し、恵の膣内がさらに締まる。

「あぁっ、出る！」

「——ンンウウウウッ♡♡♡」

果てた。まるで破裂したかのような射精感、はじけるような解放感に脳を焼かれた俺は無意識に彼女の腰を掴んで奥深くに流し込もうとしていた。

奥深くに叩き込まれた彼女は逃げようとせず、逆に自らも腰を深く落とし、俺に抱き着く形で子宮の内部で子種を受け止めようとする。

（出てるっ、牧君の赤ちゃんのもと——すごいっ、熱い、それに多いよおっ！）

「はぁ、はぁっ……くっ……」

最初の一発目、ということもあってか反動がすさまじい。ペニスの脈打つ感覚から相当の量と濃度があるのだろう。

「んんっ、だめ……これ、お腹、いっぱいになりそう……牧、くん……いっばい、出せて……気持ちよかった？」

「とても、自分でもドン引きするぐらい？」

すでに結合部の隙間から泡立った愛液と子宮や膣内に収まりきらなかった精液がどろりと漏れ出ている。

「これで、牧君との赤ちゃんでできるかな。フフ……♡」

無邪気な笑み、まるでさっきの激しさが嘘のような爽やかさだ。

「……えっ？　ね、ねえ、牧君」

「……………」

何かに気が付いた恵の表情が苦笑いに変わる。

「えっと、その、まら……また、大きくなってるの？」

「……ごめん」

射精したばかりでぐしょぐしょの膣内に現れる新たな圧迫感、やはり溜めすぎていたこともあってか、一度ぐらいでは静まらないのだろう。というかさつきよりも張りつめているような……

「ン……も、もう一度、する？」

「もう一度というか、あと……四回ぐらい？」

「う、うそでしょ!？」

こうなればとことん。たった一回じゃあ当たるかわからない、やるならはらむまで、やるなら孕むまで。

「ま、牧君っ？ 今度は私が下なの？ ねえ、どうして何も言ってくれないの？」

「……っ！」

「さっきよりおっきいよ!? ね、まっ、待って——うあっ♡」

後で謝ろう。俺は暴走して薄れていく理性を振り絞りながら、今後のことを胸に刻み込む。後日、お高いレストランにてお食事デートすることで仲直りすることができたのであった——